

風の末裔シリーズ・3rdシーズンの3
～ネメアの獅子・後篇～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

「叔父上…また、居らしてたんですか？」

蜜柑の花咲く庭園の野薔薇のアーチの下で、淡栗色の少年と
かち合って、若きフブライは心の中で舌打ちした。

大ハーン・モンテの四男坊、シリギ。また尻の青い子童(こわ
っぱ)の癖に、戦に出ると滅法強い。昔で呼ばれるあだ名が『旧
王都の碧眼へきがん』の獅子』

「病床の母の見舞いに息子が通って不都合があるのか？」

「いいえ、ありません。過ぎた質問を重ねてお祖母様を疲れさ
せなければ」

この少年は何だってこんな小憎らしいんだ？

「他意はないさ。年寄りがこの世に残したい言葉もあろうと、
聞き役に徹しているまでの事」

「…!! 縁起でもない、お祖母様はすぐ元気になるれますよー!」
「…悪かった、言葉の綾だ…」

本当に、数年前までの気弱な子供とは思えない自信の持ちち
う。戦場での活躍も人間離れている。

嘘か真か聞いた話では、獅子の行く所疾風が起こり、数百の

人垣を割って真っ直ぐ敵本陣に斬り込んだとか。

噂を話し半分と受け取っても、何か別の力を感じる。例えば
テムジンのように…。例えばトルイのように……。

それが某かの特別な力だとすれば、トルイの妃でありテムジ
ンのお気に入りだったソルカ妃も知っている可能性が高い。も
しかしたら妃が何らかの力を發揮するモノを、この気入りの
孫に与えたのやもしれぬ。

フブライは老母の前で、良いヒトを演じた。父親や兄達と仲
の悪いシリギの身を案じる振りをして、後ろ楯に付く事をチラ
つかせたりして、少しづつ妃の警戒を解いた。

妃も歳を取り、気弱にもなっていたのだろう。段々にトルイ
との想い出など語るようになり、話が反れてもフブライは辛抱
強く待った。

そして…ととうとう、求めていた核心を聞き出した。それは
想像も寄らぬ事だった。

モンゴル王朝の祖、テムジンの側には、本物の戦の女神が付
いていたのだ。そして、テムジンとその女神の間に生まれたの
が、自分の父、トルイ。自分にも戦神の血が流れている…!
シリギには戦神の能力が色濃く受け継がれているという。

それから間もなく、フビライは大ハーン・モンテの命で南方へ派遣された。

フビライは砂の下の蠍(さそり)のようにじっと待った。兄弟四人の中で、自分だけがテムジンとトルイの秘密を知っている。これは、自分が特別だからだ。テムジンの系譜を継承すべき選ばれた者だからだ。

期は意外と早くに訪れた。大ハーン・モンテが、遠征先で急逝した。王都の留守を預かっていた弟のアリクブケが、己の分もわきまえず、大ハーンを名乗った。

そんな事は許して置けない。大ハーンの冠は選ばれし者だけが名乗る為にあるのだ。フビライは兵を挙げ、王都を直指した。しかし……彼の前に碧眼の獅子が立ち塞がった。

「何故、お前がそこに居る?!」アリクブケの子供達ならいざ知らず、お前は……、本当の王は誰であるべきか、判断出来る筈だ!!」

フビライの散々の勧誘にも耳を貸さず、シリギは行く先々でフビライの軍を苦しめた。彼さえいなければとと玉座に座れた物を、継承争いは五年にも及んだ。

フビライが侵攻していた南の地は、その間に失われた。そして、お互い消耗し、臣下の間でも争いの不毛さが唱えられ始めた頃……。

「叔父上……」

まるで庭園の入り口で行き合ったみたいな口調で、シリギはフビライの前に現れた。夜中に、突然、戦の陣の寢室に。

「ねえ、叔父上……、僕の頼みを聞いてくれたら、アリクに折れるよう説得出来るけれど」

「何を、今更?!」

フビライは卓上の鈴を手に取り兵を呼ぼうとした。

「叔父上、貴方の寝首を斯(こ)うとするとするなら、今、出来た筈だよ。

僕の目的は貴方を倒す事じゃない」

「なら、何が目的だ?」

フビライは刀の束を握り締めながら聞いた。

「……………」

「言えぬのか?!」

シリギは勝手に自分の要望だけ喋り出した。

「アリクと、その息子達の命を助けて。後、アリクに手助けした諸侯達も出来る限り不問にしてやって。皆、僕に引きずられてここまで来たんだ。言うなれば、貴方の敵は、僕一人なんだよ、叔父上……」

シリギはその薄青い瞳でフビライをじっと見た。敵と言いなから、その目に敵意は感じられなかった。何とも言えない、不思議な感情が隠っていた。

「よし、お前の望み通りにしてやる。しかし、タダではない。

「こちらの条件も呑んで貰う」

「…うん」

「お前は私の配下に入り、その力を私の為だけに使うのだ。どうだ？」

「…叔父上に獅子を懐に飼って置く度量がお有りなら」

AC 一七四

王都の宮殿、戦神の居室。フブライがユコの為に設えた贅沢な石の部屋。

王は盃を手に、ゆったりした長椅子にもたれている。床のトナカイの毛皮の上にユコが座り込んで、木片のパズルのピースを積み上げている。

「それで、シリギは王さまの家来になったの？」

「表面だけはな」

「ヒョウメン？」

「アイツが本当の所、何を考えているのか解らん。結局アリクブケはあの後すぐ病死してしまった。元々身体が弱く、余命幾らも無かったのだ。そんな王を何故、意地になって玉座に据えていたかったのだ？」

「…知らないわ」

ユコは積み木の難しい所に差し掛かって、上の空で答えた。

「シリギと最初に逢ったのは子供の頃だったわ。たまに会って一緒に蜜柑の実をもいだり、蜂蜜漬けを習ったり。大人になってからはあんまり会わなくなった。大人は忙しくて、妖精の子供になんて構ってられないの…」

パズルの積み木はガラガラと崩れ、女の子はまた最初からそれを積み始める。

この妖精の子供がシリギと知り合いだというのには驚いたが、飄々と語る様は、本当に何も知ってはいない風だった。

「子供の頃はどんな話をしたのだ？」

「そうね、家族の事とか…」

「話してみる」

フブライはシリギに関する某かの情報が欲しかった。

「…それで、アタシと、ナナと、母さまと、三人暮らしたって話をしたの。今は山で一人で居る母様の事を考えながら暮らしているって」

王は妖精の娘の長い話を聞きながら、葡萄酒を一瓶空けてしまった。要するに、テムジンに付いていた女神は、まだ存命なのだ。

「母君は寂しかろう。ここへ呼べば良い。不自由はさせない。

あらゆる融通をしよう。」

「ユンは困った顔を向けた。

「母さまはあそこが居るべき場所だから居るんだわ。どうしてそつう風に通うのかしら。シリギはただ、良い家族だねって言うてくれたよ。」

王はあからさまに不快な顔をした。

「あれは…変わり者だ。ひねくれている。離れて暮らして、良い家族なモノか。」

「あれ？ でも、王さまは、シリギの事、好きなんですよ。」

「な、何で？ 俺が？」

「だって、この間呼び付けて、来るまでの間、凄くそわそわして楽しそうだったわ。」

それは…、蒼の妖精の娘を見せつけて、シリギの驚く顔を楽しんでしまっていたのだ。

「あれは…俺の期待に沿わない。子供の頃から、いつも歯向かうのだ。」

「…？？」 王さまはシリギにどつして欲しいのかしら。」

「そりゃ、忠誠を誓って欲しい。その能力を存分に、王の為に役立てて欲しい。」

「……………」

「当たり前だろう？」

「何だか、それって…。」

「…？」

「シリギでなくとも、いいのね。戦が強ければ、誰でも。」

「…c…c。」

王は妖精の娘が何を言いたいのか良く解らなかつた。勿論、強い戦士だから手の内に欲しいのだ。役に立たなくて、欲しいが価値があろうか？

ユンは上手く出来ない積み木を諦めて、窓辺に寄った。カワセミが開けた大穴は大きな窓に設えられていたが、真鍮の枠がはめられ、縦横の格子が青空を分断していた。

下の庭園にユンの草の馬が遊んでいるのが見えた。ユンに気が付くと、フワリと飛んで窓辺にやって来た。格子の間から手を出して愛馬の首を撫でながら、ユンは溜め息を付いた。

「何でこんな格子が要るの？」

「お前が外が見えねば嫌だと言っから、大きな窓を作った。」

「……………」

「格子があっても外は見えよう。」

ユンはパキパキ折れる麦わらで蝶結びを作っている気分だった。人間って、こんなにも自分達と色々ズしている物なんだろ

うか？ 母さまもテムジンとこんな苦勞をしたんだらうか？

「王サマがアタシを欲しいって言ってくれたから、アタシは此処に居るの」

「口約束だけでは何の保証も無い。お前が氣紛れを起こして去ってしまわないという保証が」

「保証……」

「我等は約束をする時は、家族を人質としてやり取りをする。

それが保証だ」

「ふうん……」

ユコは乾いた表情で馬を撫で続けた。

「わざわざ『良い家族じゃない家族』になるの？」

妖精の娘の拳げ足取りの言いように、王は氣分を書したが、

ユコは格子を指でなぞりながら重ねて聞いた。

「王サマはアタシを好きじゃないの？」

「えっ……？」

フビライは小娘相手にちょっと焦った。

「嫌いななの？」

「嫌いではない。好きだ……いや……、お前は……、色々、好ましい

……」

「じゃあ、それが、保証だわ」

ユコは青空と格子を背景に王に向き直った。

「王サマが、アタシを、好き、という氣持ちがアタシを此処に繋ぎ止めるの。アタシはアタシを、ちゃんと好きなヒトの側に居たいの」

「……………」

「王サマはシリギの事、好き？」

「……………」

AC 一二七五

蒼い巻き髪の少女が黄緑の馬を駆り、空を縦横無尽に馳せている。

「王サマー！」

頭を中心に縦に大きく一回転して、草原のフビライの横で急停止した。

「見た?! 今の！ 里でも出来るの、父さまの他はアタシだけ

なんだよ！ スピードが乗らないとダメなのよ。エン、エン……

ナントカ……」

「遠心力か？」

「そう、サスガ王サマー！」

娘はミソツ歯を見せて、屈託無く笑った。贅沢な絹を着せて室内に転がして置いても、この笑顔は見られなかった。

「アタシが大人になって、成人の馬の鈴を買えば、王サマを乗



せてあげるよー！」

「いや…遠慮しておこう。心臓が幾つあっても足りん事になりそっだ」

「ふうん…シリギもおんなじ事言ってたなあ…。楽しいのに、勿体ない」

「シリギも？」

「うん、父様の馬に乗せて賣って、目を回したのがトラウマになってるって」

「目を回した？ あのシリギが？」

「子供の頃よ」

ユユがフォローしたが、フビライはシリギの可愛い所を知って、ちょっと愉快的気分になった。

城の上階の一角が戦神の場所として、一般の兵士の立ち入りが禁じられていた。

御一人の外出は控えて下さいと口喧しく言う側近達を振り切って、王は階段を登った。重い扉を開くと、今、窓から妖精の娘が駆け戻って来た所だった。

「ああ、愉しかったあ」

「今日は随分高く飛んだな」

「うん、渡り鳥の真雁の群れと会ったヨ。もうそんな季節なん

だね」

真鍮の窓枠は大分前に取り外されていた。籠の扉を開け放しても、小鳥は逃げ出したりしなかった。逆に、王の世界を生き生きと広げてくれた。

妖精の居室はユコの好みにすっかり変貌させられていた。

ベッドのラシヤの天涯には様々な植物の干からびたのが逆さに釣り下がって、『巢』のようだった。天井や壁には色とりどりの石が星座の形に貼り付けられ、豪華な調度品は隅に追いやられた。床だけは贅沢に羊毛の敷物が敷き詰められて、王が訪ねると、ユコはそこかしこで好きに「コロコロ」していた。

シリギと子供時代に会ったのなら、見た目よりは年上なんだろう。大人の妖精もいるようだが、この子は成長しない種類の妖精なのだろうか？

一度その事を聞いたら暗い顔になったので、フビライは二度と口にしなかった。どうでもよい事だ。この娘が「ニコニコ」と自分を好いてくれていれば、それでいいのだ。

「草原台地の東の方ね……」

ユコは馬の鞍を降ろして部屋の隅へ運んだ。ペルシア製の細かい彫り物のあるサイドボードは、丁度鞍掛けにピッタリだった。馬は身軽になると庭園へ降りて行った。

「兵隊が一杯歩いてた。空気も濁ってザワザワした嫌な感じ……」

「ああ……」

フビライは盃に葡萄酒を手酌し、床のトナカイの毛皮にコロリと横になった。そこが王の定位置だった。

「オコテイの子孫達の一派が勢力を広げている」

「オコテイの……」

「草原台地はモンゴル帝国の発祥の地……大切な土地だ。其処を好きにさせては置けない」

「……仲良く出来ないの？ オコテイはトルイのお兄さんじゃない」

「血縁だから……、血縁だから余計、厄介なんだよ……ユコ……」

「……」

ユコはそれ以上口を挟まなかった。妖精は人間のやる事に手出し口出ししない、という理(ことわり)がある……と言っていた。フビライも特にこの娘を戦や政治に利用しようとは思わなかった。

「王サマが出陣するの？」

「いや、王自ら動き回れる程、今の王都は安泰ではない。あちらの制圧は息子達に任せた」

「そう……」

ユコはちょっと残念そうだった。まだホンの少し、母とテム

シンの英雄譚に憧れている感じた。

「大丈夫だ、今回の隊にはシリギも加わる。碧眼の獅子が剣を抜けば敵はいない」

「…シリギ……」

「心配か？」

「……うん……」

「なんだ、妬けるな」

「違っの……」

ユウは座り込んだ床から、天井の石の天の川を見上げた。

「王サマは太陽だわ」

「なんだ？ 誉めてくれていいのか？」

「……」

王が立ち去ってから、ユウは小さい声で呟いた。

「シリギは星なの。沢山の星の中の小さな星。太陽は自分の光が眩しすぎて、すぐ側の星を見る事が出来ないの……」

AC 一二七六

その朝のユウは、胸騒ぎで目が覚めた。

まだ外は、ほの暗い。窓から草原を見ると、一頭の早馬が城門に入るのが見えた。

言いようのない不安が胸を押し潰した。

城中が叩き起こされ、あちこちで篝火が焚かれて、不穏にざわめくのが解った。階段を昇る足音。重い扉を乱暴に開いて、真つ赤な目を吊り上げたフビライが入って来た。

「居た……！ 逃げ出していなかった……！」

「……？ どうしたの？ どうしてアタシが逃げるの？」

王はそれに答えず、大股で部屋を横断して、窓辺のユウの両肩を掴んだ。

「今、逃げ出そうとしていたのか?!」

「……?? 逃げないわ、どうして?」

「お前も……俺を、裏切るのか?!」

王はユウを掴んだ両の指に力を入れた。

「シリギのように！ 裏切るのか!!」

「えっ?」

王の灰色掛かった黒い瞳の瞳孔は開いて、唇も頬も小さく震えていた。

予感していた。いつかこんな日が来る。

シリギは敵軍と対峙した時、いきなり踵を返して味方に刃を向けたのだ。しかも、アリクブケの息子達はじめ、連合軍の主力を抱き込み済みだった。フビライ直下の僅かな軍勢は抵抗す

る間もなく襲霸(しゅうは)はされ、皇子二人は捕らわれの身となった。

「シリギ……」

ユコは言葉を無くした。彼女だって、まさかシリギがいきなり真正面から反旗を翻すとは思っていなかった。

「あれが、とつとつ牙を剥いた。帝国の中心、草原台地を制し、俺の玉座を脅かして掛かって来た」

フビライは声を震わせた。

ユコは肩を掴まれたままフビライの顔を覗き込んだ。最初の日に両腕をネジ上げられた時より力が強くて痛いけれど、あの時と違って恐怖は感じなかった。このヒトのこの不安な心を助けてあげたい気持ちの方が強かった。

「アタシは裏切らない。王サマの側に居るよ。王サマがアタシを必要としてくれる限り」

「……ユコ……!!」

王の目に正気が戻った。小さな肩に食い込んでいた指を緩める。

「お前は……裏切らないよな！ シリギから、何も聞いていないんだよな！」

「ないわ。言ったでしょう。あのヒト、アタシなんか相手にしている暇ないの」

何か知っているとしたらカワセミだ。カワセミは彼を少年時代から気にかけて、暇さえあればソルカ妃の庭園を訪ねていた。思えばその頃から、何だかユコの居場所もあやふやになって、身体の成長も止まってしまったのだ。カワセミが目覚めてから、ずっと、水色の妖精の隣はユコだけの場所だったのに……

「ねえ、王サマ、アタシが行く」

「……?!」

「シリギの所へ行く。妖精は人間の戦には手出ししない。でも、子供を想うお父さんの気持ちを助ける事は出来る。アタシ、シリギに王サマの息子だけでも返して貰えるよう、頼んでみる。断っても……」

ユコは目を閉じて少しためらって…、それから顔を上げてキパッと言った。

「皇子サマを救い出せると思う。アタシなら……」

「……ユコ……」

フビライはユコの申し出に素直にすがりそうになった。父親として。しかし、拳を握り締めた。

「駄目だ、これは、戦なんだ！」

「王サマ……」

「奴が不穏なのは判っていた。俺の油断だ。奴は俺に真っ向か

ら挑んで来た。ではこちらも立ち向かわねばならない」

「フビライはユコの両肩に手を置いた。今度は優しい手だった。

この娘は自分の為に妖精の禁を犯そうとしてくれた。里へ帰れず、母親のように独りぼっちで山で暮らす身にしてしまふ。させる訳にはいかぬ…。」

「お前は戦にそぐわない。大人しくしていなさい。何なら、戦が終わるまで、里に戻っていても良いんだよ」

「何で…!! そんな事言うの?!」

「ユコの目に光が横切る。」

「なら、アタシは何の為に王サマの横に居るの?! 愛玩動物になる為じゃない。アタシを必要だと言ってくれる王サマの側に居れば、アタシが生まれて来た意味が、分かると思ったからよー」

妖精の娘は怒に後退りして、後ろ向きに飛び降りた。

「ユコ!!」

一瞬消えた娘は、次に乗馬した姿で視界に戻った。

「シリギの所へ行く!! 王サマを苦しめるのなら、アタシはあのヒトに立ち向かう事になっても構わない!!」

巻き髪を頬にかけて激しい目で叫ぶ娘の迫力に圧され、引き止める手が一拍遅れた。ユコはフビライと目が合う前に目をそらし、旋風と共に消えた。

く シリギ く

カワセミは一足遅れた。

王都に到着した時にはユコはもう飛び出した後だった。妖精の娘の居室の窓は開け放され、もぬけの殻だった。目を閉じて探ってみるが……

「……駄目か……」

とにかく、なんでかユコとナナの双子に関しては、予知も透視も効かない。まるで二人がこの世に存在しない者のように。

「成りは子供だが、教えは叩き込んでいる。滅多な事はしでかさないと思うが……」

王都にそびえる城は、越冬前の蜜蜂の巣のように、人間達が忙せわしく走り回っている。だが、差し当たって、フビライ自らが動く事はないだろう。水色の妖精は馬を返して草原台地へ引き返した。

ユコはわざと高度を上げて馬を飛ばしていた。カワセミがあまり高い所を飛ばない事を知っていた。今、あのヒトに会ったら喧嘩してしまいそうだからだ。

フビライは悪王ではない。…というより、近年稀に見る賢王なのだ。ユコの鼻肩目でなくとも、テムジンの後継を名乗って

遜色ない。

玉座争いで混乱したモンゴル中央をまとめるのも素早かったし、大陸南方の侵攻も、バヤンの人柄もあるが、異例な程血を流していない。

今更そのフビライの支配に抵抗する事も、自らが玉座を狙う事も、ユコの知っているシリギからは考えられなかった。

ユコは飛びながら生唾を呑み込んだ。

……………理由は、あるんだろう……。あのヒトはずっと自分の生まれて来た意味を探って生きて来た。カワセミ様はそれを手助けしていた。これがその過程なら、行き着く答えがあるんだろう。でも、アタシは……………

「王サマを助けたい!!」。

理由なんか無い、絞り出した想いだ。

不意に後ろから腕を掴まれた。

「?!」

心肺の弱いカワセミはこの高さは飛ばない筈だ。長い髪を顔に掛け、眉根を寄せてユコを覗き込んでいたのは、双子の片割れ…ナナだった。

シリギは目を閉じていた。

とつとつこの目を迎えた…。フビライの元へはもう戻れない。

主張が違っただけの後継争いとは違う。今回ののは真正正銘、裏切りだ。

あの、少し困った親し気な半笑いがもう見られないのは、ちよつと寂しい。嫌味でなく、わりと本気で……………。

天幕の外から仰々しく声が掛かり、毛色の違った武将が通された。甲冑の出で立ちが微妙に違う。戦慣れて着こなれていた。

「此度(こたび)は…何と言つか…我等は、どう受け取ればよいのだ?」

本来の戦相手、オコデイ一族の軍勢よりの使者だ。

シリギは立ち上がって、ぶっきらぼうに答えた。

「素直にそのまんまだ。我等は、フビライに反旗を挙げた。即ちアンタらの敵じゃなくなる」

「…いきなりそう申されても…」

「事前に相談が必要か? それで、アンタだったら素直に信用するか? やっちまったらこっちのなんだ。アンタらはこちらを受け入れざるを得ない」

「……………」

「もひとつ証が欲しいだろ」

「……………」

「人質の皇子二人をくれてやる」

「な、何と?!」

「アンタらはフビライに対して非常に有利に立てる訳だ。少なくとも自分達は安泰だ。直接攻撃は受けない」

「…解り申した。その申し出、我が大将に伝えましよう。その代わり反乱軍に手を貸せ…という事ですか？」

「うん…まあね…」

淡栗毛の将は少し首を傾げた。

「それよか、最優先に守って欲しい約束事があんだけど」

「出来得る事なれば」

「皇子には皇子としての扱いを。礼節を外しては誇り高きモンゴル王族ではなく、ただの蛮族に成り下がる。あいつらに何かしたら、碧眼の獅子が黙ってはいないからね」

「…解り申した…」

使者は最初の無骨な態度ではなく、真摯な礼をして天幕を出た。

その使者に見える由もないが、天幕の上の落葉松の枝に、双子の妖精の影があった。

「……シリギ……」

「逢って行くわ」

二人、木の両側で静かに立って、今のやり取りを聞いていた。

「ううん…、やっぱりシリギはシリギだ…って、分かっただけ

でいい…」

「ここへ来る道々、ナナは、ノスリに聞かされた自分の知っている事を、ユユに伝えた。数十年前、カワセミが九死に一生の目に遭いながら防いだ災厄が、フビライの身を借りて現れた事。シリギはずっとフビライでなく、その災厄の歪みと戦っていた事…。」

「アタシ、分からなかったの。シリギが何で戦を手段にするのか。話をして解決できないの？ って」

「ユユ…」

「違っただんだわ。王サマと話していても、何となく気付いた。戦は災厄と同じで、ヒトの力じゃ抗えない大きな流れだった。

シリギはそこに飛び込んで、流れを変えようと挑んでいたのね」

「うん…」

「やっぱり、シリギは子供の頃のあのシリギのままだった。大人になっても、何にも変わっていなかったのね」

「兄は、頬を上気させる妹の横顔を少しの間見つめてから、口を開いた。

「妖精は人間の生業に手出し出来ない。彼はそれが解って、一人で引き受けている」

「…アタシ達、本当に何にも出来ないの？」

「災厄はどんな形で来るか分からない。人間が荒れると必ず人外界にも影響が出る。蒼の里では、ただ日々をまっとうに積み重ね、他部族とのネットワークを張る事で守りを固めている。地味だけれど、ノスリ長も、父上も、大長も、頑張っているんだ」

「…ナナも？」

「うん…まあ…」

「アタシひとり、子供で我が仮だから、何も教えて貰えなかったのね…」

「それは違う!!」

ナナは少し声を高めてユユに向いた。

「ユユは…!」

兄は言いかけて躊躇した。しかし、ここまで言いかけたら、言ってしまった方が良いだろう。

「ユユはね、カワセミ長が、ユユには何も知らせないまま好きにさせておくべきだった」

「カワセミ様が…アタシを放っとけっ?」

「違う…、だから…カワセミ長は、ユユの可能性に賭けていたんだ」

「…?」

「フビライ王は、ユユと逢った最初の頃と、おんなじか？」

「…ううん? いろいろ…話を通じるようになった…?」

「だから、ユユが側に居る事によって、災厄は変化して行くんじゃないかって。カワセミ長はそう考えて、ユユに希望を託していたんだ」

「……………!!」

「自分が逢いに行くとユユの自然な行動を妨げるからって、無理しちゃって、あのヒト…あー!」

ナナは慌ててユユを引っ張って落葉松の枝の中へ姿を隠した。カワセミの馬がシリギの天幕へ降りて行くのが見えた。久し振りに見る師は、酷くやつれて顔色が悪い。

「ね、あのヒトが、こんな近くの僕達に気付かないなんて、有り得ないでしょ。ユユがいなくて、ずっとああなの…あのヒト。術の力も注意力も落ちちゃって」

「……………」

ユユは言葉が出て来なかった。今まで抑えていたモノが、喉の奥から熱く突き上げて来た。あのヒトの心には、ちゃんと自分の居場所があったんだ…。

「ねえ、僕達の母様の正式な名前、知っているっ?」

壇の壊れそうな妹の顔を見ないで、兄は問った。

「……c」

「『慈しみの蒼の狼』っていうんだ。ユゴはね、その慈しみの部分を一番に受け継いでいるんだよ」

ナナは遠く風出流山の方向を見やった。

「その慈しみの心は何より大きな力なのかもしれない。ね、ユゴ、さつき、自分達に何も出来ないのか？　って聞いたら？　僕もずっと、それを考えていた。それで思い当たった事がある」

「……ナナ……c」

南方の地平に陽炎のように横に長い影が現れた。近付くにつれて、それが延々続く大部隊なのが分かった。大ハーン、フビライの命を受け、反乱軍討伐に参じた『百眼の鬪将』ハヤンの軍勢。

先頭近くに、眉間に幾重にも皺を刻んだ大将が、出立してから一言も喋らずひたすら馬を進めていた。その面持ちは、歩を進める毎に沈痛になって行く。側付きの者は腫れ物に触るように口を聞く事も出来なかった。いつもは豪放な、部下思いの大將なのに……。

王都に帰還し、目通ったフビライも、更に多くの皺を刻み、鉛を呑み込んだような顔色をしていた。王は形式ばかりの勅命を受け、将は言葉少なに、肅々とやるべき任務に付いた。

「王サマ……」

謁見の間から下がったフビライが一人になるのを見計らって、ユゴが駆け寄った。妖精の娘が居室を出て城内をうろつくのは珍しい。

「今のが『百眼の鬪将』？」

「ああ、奴が来たからには安泰だ。反乱軍は一年以内に沈黙するだろう」

「そう……そうね……。皇子サマ達、早く帰れるといいね……」

あの日、ユゴは夕方遅くに帰って来た。里の兄に行き逢って説得され、シリギには会わずに引き返して来たと言う。漏れ聞いた話で皇子は酷い扱いを受けていない事だけを教えてくれた。そして、それからシリギの事は一切、口にしなくなった。

本当はシリギに会って、何か申し合わせたのか……？　と一瞬疑ったフビライが恥じ入る程、妖精の娘は王に真摯に接した。

この娘が、嘘がつけず演技も出来ないのは、フビライには分かっていた。無駄に長年一緒に居た訳ではない。

「王サマ、百眼の鬪将はすぐ発つのか？」

「明朝だが、……どうした？」

「うん……アタシ、用事があるの」

「お前が？　ハヤンに？」

「うっん、鬪将の側に居るヒトに…」

月が照らす庭園の噴水の塔の上に、妖精の娘は凜と立っていた。上空の三日月が一瞬歪んで、月の影の中に赤い狼の姿が浮かんた。

「蒼の妖精のお嬢ちゃんが、俺様に何か用か？」

「……………」

「青い眼の小僧の命乞いなら無駄だぜ。すべてはバヤンの意志だ。俺様は手助けしているだけ」

「手助け…？ どんなヒトだって欲望は湧く。でもそれを抑えて忘れて、そういう中から本当に欲しいモノを見付けて行くのよ。何でも叶ってしまうと、そのヒトは何が大事か、見失ってしまうわ」

「知った風な口を聞くじゃねえか、お嬢ちゃんー」

獣は銀の三白眼をギラつかせながら、娘に斜めに近付いた。

「アタシが言ったんじゃない…」

「……？」

「昔、母様が言ったの。アタシが、母様の術で何でも出来るねって言った時」

赤い獣は心底嫌そうに顔をしかめた。

「…そいつぁ反則だ。何で、今、俺様にそれを言っつ？」

「……………」

ユウは塔の上に突っ立ったまま、考え込んだ。どうやら思っていたのと話がそれてしまったようだ。

「アタシはただ……………」

「うっん？」

狼は、ユウに息が掛かるほど、大きな牙のはみ出た口を近付けた。

「アンタに、自分の本当に大切なモノを見つめ直して、バヤンの元を去って欲しかったの」

狼は牙を剥いて娘の喉笛に迫った。

「二度と、俺様に、そんな口を、きくんじゃねえ!!」

ユウは目を見開いて刃物みたいな牙を見つめ、それでも絞り出すように言った。

「アタシ…………アンタの為に、何か出来る…？」

「だ・ま・れ…………!!」

「妖(あやか)…………?!!」

月光の下、いつの間、鬪将が立っていた。

「どうした？ 何と話している？ 妖…?」

妖精の娘はバヤンの気配で素早く消えていた。

「何でもない。とっとと寝ろ。明日から忙しいんだろ」

狼は空中を歩いてバヤンに寄り添うように周囲を回って、大きな声で言った。

「青い眼の小僧っこの首を掻っ切りに行くんだよナ!!」

獣はクルリと回って闇に消えた。

バヤンは立ち尽くしていた。噴水の池に映る、目の下に深い隈を作った幽鬼のような自分を茫然と眺めている。その水面に一瞬女の子が映ったような気がした。驚いて見直したが、消えていた。

百眼の鬪将は、フビライの期待に違わず、目覚ましい活躍をした。

まず、草原中央を制していた反乱軍をたちまち蹴散らし、失った所領を瞬く間に取り戻した。オゴディ家の軍も、その他の元々の勢力も、大きく後退した。

しかしバヤンはシリギにたどり着けなかった。あちこちで出現の情報は耳にするのだが、まるで鬼遊びしているように、バヤンが到着すると、スルスルスリと別の所に移動しているのだ。

バヤンが執拗にシリギを追い掛けるもんで、戦の段取りは乱れ、無用に長引いた。知将らしくもない、と揶揄されたが、バヤンは碧眼の獅子にこだわるのを止めなかった。

バヤン本人にも説明付かなかった。裏切られた憎しみだけで

はない。この長年の焦然とした乾き……それは淡栗毛のあの少年にたどり着く事では、潤されない気がした。何でか、そんな気がした…。

バヤンの進攻で、今や反乱軍はその体を成していなかった。協力する筈のオゴディ家の勢力も、人質の身柄だけを受け取って、地元の戦に集中していた。元々烏合の衆なのだ。

バヤンを長とした小隊は、今、まさに反乱軍最後の将、碧眼の獅子を追い詰めていた。奇しくも大昔、少年だったシリギがバヤンを見送った、…旧王都の城跡だった。

シリギが籠城しているとの知らせを受け、バヤンは身軽に手近な小隊だけを引き連れて、夜闇の中を急行した。

今度こそ逃してなるものか！ 何、もう兵も残り少ない筈だ、こちらも兵隊など少数で構わん！ と思っていたが…。

油火を放って燃え盛る城から、逃げる人影はなかった。また藻抜けの殻…?!

バヤンは急遽、小隊に周辺の搜索をさせ、自分は徒歩で城跡の火の回っていない所に踏み込んだ。

シリギが折角復興させていた城は、反乱の年月で、また廃墟となってしまうていた。

「……………?!」

バヤンの前を白い小さな蝶が横切った。

こんな炎の戦場に…?」

蝶は彼の周りを一回りして、奥の細い通路に飛んだ。

「……………」

バヤンは吸い寄せられるように蝶の後を追った。無骨な石の城跡の路地を抜けて、塀の先に何か見えた。

「……?」

不意に、雲囲いの違う場所に行き着いた。見えたのは藁のアーチで、それをくぐると、何やら蔓つる植物が野放図に広がった庭園に出た。眼前に白い花が満開の木々が広がり、戦場にそぐわない清しい香りが満ちる。

月に照らされたその下に、追い求めていた淡栗毛の獅子が居た……!

スクと立って、人指し指の先の蝶をふっと吹くと、それは花びらとなって散った。そうして、バヤンを見止めて、ゆっくり振り向いた。その顔に追い詰められた敗将の焦りは微塵もない。

バヤンの方が狼狽えて、抜刀しながら辺りを見回した。

「独りか…?!」

「うん………」

シリギは剣を習っていた少年の頃と同じ口調で、軽く言った。

「ここまで着いて来てくれたからね…。みんな、城にある物、好きなだけ持って故郷へ帰れって追い出した。もう大したモンも残ってなかったけれどね…」

シリギがボウツと突っ立ったままなので、バヤンは剣を構えて叫んだ。

「抜け!!」

シリギはまだ動かず、バヤンを見ている。

「私は…お前を倒す為に、戦場を駆け、ここまで来たのだ!! 抜け!! 私と剣を交えよ!!」

シリギはうつ向いて、剣に手を掛けた。

「バヤンがそれを望むなら……」

「おう! 剣を教えた甲斐があったと思わせてくれ!!」

バヤンは高揚して、自分でも思わなかった言葉を口走った。

シリギはちょっと止まって、それから………ちよっと笑った。

蜜柑の花散る庭園で、百眼の鬪将と碧眼の獅子は、心行くまで剣を打ち合った。

自分は……これを求めていたのだろうか……?」

不意に辺りの明るさが増した。燃え盛る城の火が飛んで、蜜柑の木に燃え広がったのだ。



シリギがそれを見て茫然とした瞬間、鬪将の剣が彼の剣を弾いた。赤い石の付いた剣はクルクルと回って、離れた地面に刺さった。そのままバヤンはシリギに馬乗りになって、両手で剣を首に当てる。

「……?!」

倒れたまま無抵抗の相手に、鬪将は躊躇した。

シリギは組み伏せられたまま静かな声で言った。

「僕の首を持って勝凱かちどきを挙げれば、この戦は終わるだ。人質も返る。君の義兄も」

青い目はまばたきもせず、ただバヤンを見つめる。

「何でだ?! お前は何を考えている?! 何を望んで……?」

「とっととその首をハネろおお——!!」

バヤンの後ろから赤い獣が飛び出した。

「お前さんは、こんな所で立ち止まっちゃいけないんだよ!

まだまだ、その鬪将の血を燃え立たせ、俺様を楽しませてくれなくちゃ……!!……っっ」

赤い狼の鼻先に、いきなり緑の槍が突き付けられた。

シリギに馬乗りになったバヤンを挟んで、水色の長い髪の男性が狼を睨みながら、宙に浮かんでいた。

バヤンは目を疑った。その男性にはどう見たって、半透明の

羽根があるのだ。

「貴様の相手は……このボクだ……!!」

羽根の男性は地の底から湧くような深い声で言って、槍を構え直した。

「へえ……へへえー!」

赤い狼は、バヤンとシリギからいっぺんに興味が翔んだように、水色の男性を見た。

「蒼の妖精の長殿が、俺様の相手をしてくれるって?! そいつあ…盆と正月がいっぺんに、だぜえ!!」

「カワセミ!」

黙っていたシリギが叫んだ。

蒼の妖精は深い水色の眼を細めて、彼を見る。

「こいつは…ボクの管轄だ…」

それからバヤンを見た。

「こんなのに憑かれていたのは、お前自身の弱さだ!」

「『こんなの』で悪かったな!!」

狼が妖精に飛び掛かった。

妖精は一瞬で消え、離れた上方に乗馬した姿で現れた。

狼は踵を返して、口の端を上げて牙を剥いた。

「へへっ、そう来なくっちゃ!! 本気出せよ!!」

狼は赤い光となり、蒼い光ともつれ合いながら、漆黒の空高

く昇って行った。

残ったバヤンは暫く茫然としていた。あの妖(あやか)しは、自分の妄想ではなかったようだ…。

「…ねえ……………」

身体の下(した)のシリギの声で我(わ)に返(か)った。

「やるならさっさとやっつけてよ。さすがにこの状態のままは……ちよっと辛い……」

バヤンの両手(りょうて)は、剣(けん)を握(にぎ)ってシリギの首(くび)を地面(じめん)に押(お)さえ付(つ)けたままだった。

旧王都(きゅうおうと)の上空(じやうくう)高く、赤(あか)い光(ひかり)と蒼(あお)い光(ひかり)が円(まる)を描(え)いて睨(にら)み合(あ)っていた。

「蒼(あお)の妖精(ようせい)の長(なが)とやり合(あ)えるなんて、骨(ほね)の髄(みず)まで疼(いた)くぜ!!」

「…そんなに、闘(たたか)うのが好き(す)いか?」

「ああ、俺(おれ)は身体(からだ)の芯(こゝろ)まで戦(いくさ)神(かみ)だ。強(つよ)い奴(やつ)と闘(たたか)うのに至(いた)上の歓(か)びを感じる!!」

「そんな貴方(あなた)に、残念(ざんねん)なお知らせ(しらせ)です」

「……?!」

「実は、ボク、戦(いくさ)闘(たたか)って、ほぼ、した事(こと)がない」

「何(なに)だとおお!!」

「戦(いくさ)闘(たたか)管轄(くわんくわつ)は相棒(さへばな)だったもんで…」

「あのタイミングで割(わり)り込んで来(き)て、そゆ事(こと)ゆーなよおー!!」

「闘(たたか)わないとは言(い)ってない…」

カワセミは槍(やり)を頭上(かぶ)に掲(か)げてピタリと止(と)めた。

「闘(たたか)い慣れていないって事(こと)だ。いつも一(ひと)発勝(か)負(ま)だったから。だから……手加減(てかげん)出来(こ)ない!! 悪(わる)く思(おも)うな!!」

槍(やり)はマックスの光(ひかり)を放(はな)つて、狼(おおかみ)へ一直線(いちじくせん)に飛(と)んだ。

上空(じやうくう)の強(つよ)い光(ひかり)に目(め)を細(こ)めて、シリギは座(ま)り込んでいた。燃(も)え盛(も)る蜜柑(みつだん)の木(き)が花(はな)を散(ち)らせながら崩折(くずれ)れて行(い)く。隣(とな)でバヤンも座(ま)り込んでいる。

「バヤンにも、あの光(ひかり)、見(み)える?」

「ああ…、他の人(ひと)間(ま)には、見(み)えていないのか?」

「うん……………」

「それで、さっきの話(わたり)の続(つづ)きだが…」

「うん……………」

「フヒライ王(おう)が災厄(さいあく)を抱(かか)えていると言(い)ったが、私(わたし)にはあの方は素晴(すはら)らしい王(おう)に見(み)える」

「うん……………」

シリギは膝(ひざ)を抱(かか)えて、形(かたち)を無(な)くして行(い)く庭(にわ)を見(み)つめていた。

「叔父上(おじやうじやう)は良(よ)い王(おう)だよ。僕(わ)もそう思(おも)う。災厄(さいあく)は叔父上(おじやうじやう)の良(よ)い悪(わる)

いとは関係ない。あのヒトも被害者なんだ…」

ハヤンは黙ってオレンジに染まる淡栗毛を見つめた。妖とすつと一緒に居た自分ですら、まだ半信半疑なのだ。だから、あの夜バルコニーで話さなかった彼の気持ちは分かる。

「本当は、災厄は半世紀以上も前に訪れる筈だったんだ。テムジンの時代に」

「そんな昔か…」

「モンゴル帝国の膨張が何らかの摂理に反した。だから何らかの力が働いた」

「『何らか』って何だ…?」

「さあな…。説明を簡単にするなら『神』と言うのが手っ取り早いかもしれない」

「……………」

「僕はそんな神サマ願い下げだ」

「…ああ……………」

「それで、フビライ、だ。あのヒト、優秀過ぎた。あんなヒトが素直に大ハーンになったら、大陸の制覇なんて一気だ。『何らか』が捻じれて口を開く。フビライと背中合わせに災厄の裂け目は存在したんだ」

「……………」

「で、大ハーンになるのにちょっとミソを付けた。南の地を失った上に、帝国全体が弱体化した状態で即位となった。フビライの身の内に見えていた裂け目がきれいに閉じた。胸を撫で下ろしたよ」

「……………」

「なのに、ハヤンが来ちゃった。百眼の鬪将…。逢えて嬉しかったのに、今後の事を思うとウンザリだった」

「…悪かったな……………」

「さすがっていつか、何ていうかさ…。あつと言つ間に南の地を取り戻しちゃうんだもん。裂け目はち切れそうに大きくなるし、どうしようかと思つた」

「それで今回の反乱か」

「うん、とにかくハヤンを南から引き離さなきゃって。アリクの息子達は元々切っ掛けを欲しがっていたし、簡単に乗ってくれた。今はオコディ家の手下。まあまあ皆、簡単に裏切ってくれちゃって…」

「お前は…、何者のつもりだー!」

ハヤンは正面向いてキツと言った。

「お前の話を聞いていると、全部お前の一人判断だ。その災厄の裂け目とやらを見ているのもお前だけ。もしもそれがお前の妄想だとしたら、お前はどれだけの罪を重ねている?!」

「物事の流れを見据えて真実を見極める能力も万全ではないのを、シリギは最近思い知った。この大切なヒトが、どれだけ自分を好いてくれていたか、全然見極められていなかったのだ。だからここへ誘い込んで、全て打ち明けた。今の自分がこのヒトに出来る、たった一つのコト……。」

「さっきの有翼の妖精…カワセミの存在も、妄想かい？」

「え？…いや…」

「テムジンの時代の災厄を、命懸けで止めたのはあのヒトだ。」

それからトルイだって、最後の最後まで災厄と闘った。僕は彼等からその先を引き受けたんだ。これが見えざるものを見てしまっ僕、生まれて来た意味なんだ」

「……………」

「だけれどね、カワセミが居ないから言っちゃうけど、バヤンが言ったように、罪は罪だ」

「シリギ…？」

「さっき、何が望みかって聞かれたけれど…、そうなんだ、君の太刀で裁かれるのが、僕の密やかな望み…」

シリギはとても怖い事をとてもサラリと言った。

「お祖母様が亡くなってから、人間の中で好きなのはバヤンだけだったから」

「……………」

一番大きな木が、役目を終えたように崩れた。

バヤンは遠い旅から戻って来た気持ちになった。長い旅を終えたら、また淡栗毛の少年の元へ帰って来られたのだ。

少年はちよっと甘え声で言った。

「ねえ、どの道、王の前に引かれたら打ち首だ。むさ苦しい首切り役人に刃を当てられる位なら、今すぐ、バヤンにして貰いたいな……………」

「……………出来るか…、そんな事……………」

「そうだ、させない…!!」

羽根を一杯に広げた水色の妖精が、いきなり眼前に降りて来た。二人は内緒話がバレた子供のように飛び上がった。

「赤い狼は？」

「取り逃がした」

「おやまあ…」

「取り敢えず当分は人間に近寄らないと約束させた」

カワセミはギロリとバヤンを睨んだ。

「自分の弱さは自分で克服しろ。シリギに手出ししたら人間だろうと容赦しない！ 分かったな！」

「あ…ああ…」

それだけ言うと、茫然とする二人を残して、馬を呼んで飛び立ってしまった。

くカワセミく

赤い狼はカワセミの最初の一撃を寸でかわして、髭を焦がしながらも、不満を感じた。今の一撃は力は大きい、本気度が感じられない。当てるつもりが全然ない？

「お前さん、本気出せつつあったろうが!!」

「……………」

「本気出す気はないんか?!!」

「何でか、お前に本気にならない!…」

「ふざけんな!!」

「…すまない!…」

赤い狼は、自分の力が封じられて行くのを、感じた。前にもこんな事があった。あの時も、本来の力を取り戻すのに、随分時間を要したのだ。

「……………やっつけられたっか!!」

「しゃーないな、今回はお前さんの、その背中の中の羽根に免じて、退いてやらあ!…」

また退かされる羽目になった。

「人間にちよっかい出すのも止めてくれるか。歪みのある間だけいいから!…」

「俺様に『お願い』すんな!!」

狼は捨て台詞と共に去りかけて、ふと思いついて振り向いた。

「あ、そう、…王都の手助だけだよ!…」

銀の眼が少し細まる。

「あのとチビ、ガキの癖に、物事がちゃんと見えている。何か企んでる、気を付けな!…」

カワセミは、あの捨て台詞が気になって、王都に馬を早めていた。

シリギとハヤンは大丈夫だ。これ以上傷付け合う事はない。

今は……………ユユ!…」

王都の城の庭園。

ユユが城へ来た時、馬の為に植えた赤爪草が株分けして、今はちよっとした群落だ。フビライは気配に振り向いた。

「ユユか?…」

「はい…眠れなくて散歩していたの。王サマも?…」

月明かりに浮かんだシルエットは、小さな女の子ではなかった。スイと伸びた手足はしなやかで、細かいウエーヴの掛かっ



た空色の巻き髪が背中の中まで流れる、大人の一步手前の少女だった。

小鳥みたいだった声も、落ち着いて、少しハスキーになった。背を覆う丈の長いリースのケープを引き摺りながら、王の側に寄る。

フビライが一年以内に片が付くと言った反乱軍の鎮圧は、シリギの巧みな動きで遅れに遅れていた。

その間…、ユノは、サナギが蝶になるように、急に成長した。正確には、シリギが反乱を起こし、ナナに災厄の事を聞いた日からだ。

フビライはこの何年かで随分背が伸びた娘を見やりながら、眼をしばいた。

「百眼の将が、もうそろ奴を追い詰める。今度のバヤンはしくじらないだろう」

「……」

「シリギが引かれて来たら、お前は奴の命をいやすものかい？」

「しないわ」

ユノが即答だったので、王はちょっと意外な顔をして、彼女をマジマジと見た。

「だって、王サマは、シリギの首を跳ねたりしないでしょ？」

「またもやキパリと言う娘に、フビライは苦笑いした。

「何故そう思う？ 奴のした事を客観的に考えれば、最低、打ち首だ」

「でも、王サマはシリギの事、好きなんでしょう？」

昔と同じように、ユノはあっさり言い切った。

「だって、でも、俺は王だ。好き嫌いで物事は通せないんだよ」

フビライはいつもの、父親のような口調で、ユノに諭す。

そしてユノはいつものように、はなだ色の澄んだ瞳でじっと王を見た。この瞳の力で、いつも王の心は余計な物を剥がされ、洗い流される。

「ああ、そっだ…!!」

フビライは息を吐いて、月を仰ぎ見た。

「奴の…、優しかった母そっくりの細い淡栗毛も、憧れだった父そっくりの姿や仕草も…、昔から俺の心を捕らえて離さない！…今もだ!!」

「…王サマ…」

「だが、奴はいつだって、俺の手をすり抜けて行く。後見を申し出た時も…、配下に置いた時も…」

王は今度は下を向いて自分の両手を見た。その手の中に何度か置きながら、シリギはいつもすり抜けて、遠くへ行ってしま

った。トルイの面影と共に。

ふと顔を上げると、ユコが真正面に居た。はなだ色の瞳が間近で王を見つめる。

「……ユコ。」

「オレンジ色の光が……」

「なんだって?」

「災厄が、また首をもたげようとしている……。王さま……」

「なに……? 何を言っているのだ?」

「以前は、玉座を、覇権を、欲しがった。でも、今は、違う。ヒトの愛を欲しがる欲。そしてその欲が大きくなるのと一緒に、災厄の裂け目も広がっている」

「ユコ……? だから、何の事だ?!」

「でもね、王さま、その欲なら、アタシが受け取ってあげられる」

「ユコは静かに微笑んで、白い細い腕を王の肩に回してふわりと浮いた。」

「……?!?!?!」

仰天して凍り付くフレイの頭を、暖かい腕が包んだ。瞬間、何もかも忘れて、限らない安心感に包まれた。

……唇に、何かが触れたと思ったら、もうユコはそこに居なか

った。

「——ユコ——!!?」

夜の風が赤爪草を揺らし、妖精の娘の返事は二度と返らなかつた。

空が藍色に沈む成層圏。遠く地平は円を描き、その端に昇りかけた太陽が見える。

一気にそこまで駆け昇ったユコは、胎児のように丸まって、宙を漂っていた。何か近づく気配を感じて、閉じていた目をうつすら開ける。

「……ユコ……」

宙を歩いて来たそのヒトも、馬を連れていなかった。彼らの馬も、この高さまでは無理なのだ。

「ここなら誰も来ない。ここまで昇れるのは僕達だけだから」

「……ナナ……」

長い髪を宙に漂わせながら、双子の兄はすっかり様変わりした妹に微笑みかけた。

「受け取って来れた?」

「うん……」

ユコは丸まっていた身体を開いて、胸に抱えたオレンジの光をナナに見せた。それは銀河のように渦巻いてチロチロ光って

いた。

「これが、災厄の、裂け目」

災厄はフヒライの欲を糧に育っていた。それが権力や財産に
対する欲である限り、永遠に充たされる事はない。

しかし、彼の心が塗り替わり、欲する物が変わったら…？

「愛なら、アタシでも、与えてあげられる」

「そして、欲が充たされれば、災厄も身から離す事が出来るん
だ」

二人が話し合った通りになった。誰に教えられた訳でもない。

二人は生まれる前から知っていたような気がする。

ユコは手の中の災厄の光を見据えた。まだもう一仕事残って
いる。睡をコクリと呑み込んでナナを見つめた。

兄は黙って頷うなすく。

静かに目を閉じて、少しつつ両手の間の災厄の光を解放する。

怖くて、睫毛が小刻みに震えた。

「勇気を出して、ユコー」

ナナが正面から叫んだ。

「僕がここにいる！僕は、決して、妹を、見捨てたりはしな
い!!!」

ユコは薄目を開けて頷き、両手を大きく伸ばした。災厄の光

が放射状に伸び、解放されようとする。

瞬間、ナナがユコの両手を掴んだ。伸びていた光が徐々に収
縮する。

「そしてね、ユコの解放する力を、完全に相殺出来るのは、僕。
それで災厄は完全に消滅させる事が出来る。二度と再発しない
ように。これが、僕達が、双子で生まれて来た意味だ!!!」

あの日、シリギの天幕の上の落葉松の枝で、二人で話し合っ
た結論だ。あの日以来、二人は誰にも打ち明けず、粛々とこの
日を待っていた。

誰にも言えなかった。結果がどうなるのか分からない。災厄
のエネルギーが想像つかないのだ。エネルギーがユコのすべて
を必要とするのなら、ナナだってすべて使い切る事になる。

そして、多分やっぱり、……そうなのだ……。

二人を包む光が眩しくて、もう目を開けていられなかったが、
緊い下手はけして離さなかった。このまま力を解放し続けてい
れば、災厄は消滅する。僕らと共に……。

「……?!」

ナナの意識が不意に呼び戻された。目を開けると、身体の間
りが銀色のヴェールに包まれていた。目の前のユコが微笑む。



「母さまが、羽根を、くれていたの」

「母様が?!」

「うん、だから、ナナは、大丈夫だよ…」

「え?!」

微笑んだ顔のまま、繋いだ手を離され、思い切り突き飛ばされた。

「ユコ——!!」

ナナは銀の羽根に包まれて、地上へ運ばれて行った。

「ナナまでいなくなっちゃったら……みんな、悲しむじゃない……」

銀の羽根は二人とも助ける力は持っていないかった。

蒼の狼だって、二人の計画を知っていた訳じゃない。知っていたら、羽根を二つともくれたろう。ただ、神殿でのナナの気持ちを尊重して、一時ユコに持たせてくれただけだ。やはり、羽根は野にあるべきではない。

「それに、白い方の羽根は、母さまに、とっても、似合うもの。アタシの大好きな……薄蒼の羽根と同じに……」

冷たい空間でユコは意識が遠退いて、ゆっくり後ろに倒れて行った。

オレンジの光はもう、欠片かけらもない。

「良かった……」

……春の草原の匂いがある……。

ユコはうつすら目を開けた。

暖かい胸が目の前にある。水色の長い髪が頬に触った。

「……………」

両手が背中にながちり回り、水色の妖精が全身でユコを抱き抱えていた。

半透明の羽根が目一杯広がって、二人を覆っている。羽根の欠片が一枚一枚剥がれて、空間を漂ってキラキラしていた。

「カ・ワ・セ・ミ・さ・ま……?」

「…ふにゃあ……」

ユコが力を振り絞って、カワセミを抱えて空気の濃い所まで降りると、眉間に縦線を入れたナナが、カワセミの馬を連れて待っていた。

本当に本当に、偶然に、…落ちこちて来たナナがカワセミに行き合ったのだ。

地上に降りる間に、ユコにもたれたカワセミの羽根は、一枚一枚ほころびては散り、蒼の里が見える頃にはすっかり無くな



ってしまった。

「巫女様………」

カワセミは翌朝には意識が戻った。

いくら羽根があっても空気の薄い成層圏までどうやって翔んだのか、本人にも分からなかった。ただ、頬に霜の降りたユユを抱えて、ひたすら祈ったのは覚えていた。

自分の力ではない。巫女が、自分にユユを返してくれた。その事実を、しっかりと受け止めなきゃならない……。

ナナは不機嫌だった。

父親にもノスリ長にも一生分の説教くらったし、フィフィにもギャンギャン叱られた。何で自分だけ……と思うが、そういう役回りなんだろう……と、諦めるしかない。

ユユが帰って来てくれただけで何でも許せた。しかし、ユユの事だけは、多分一生、許さない。自分の中だけで。

ノスリは通常業務に戻っている。

自分の自慢の子供達がトンでもない事をやってのけた！その歓びで顔が緩みそうになるのは抑えねばなるまい。

褒めてはいけない。結果を考えたら背筋が凍る。まだまだこ

の二人からは目が離せない。

ツバクロは風出流山の神殿で蒼の狼と居た。

蒼の狼がユコに羽根を預ける事を決め、王都にいたユコを山に運んだのは、ツバクロだ。

彼女の決意に最初戸惑ったが、何も言わずに従った。長の血筋の先を見る力…というより、母としての虫の知らせに従ったのだ。やはり…彼女は母親だった。

ただ母は、ユコが何も言ってくれなかったのは不満だった。

言ってくれば羽根など皆あげたのに。いえ、言ってくれなくても、お菓子を欲しがるといいたい欲張りな振りをして、両方欲しがってくればよかったのに。

いつもは穏やかに何でも受け入れる妻が、この時ばかりは目一杯愚痴って、ツバクロはひたすら聞き役に徹した。

里奥の放牧地。丁度、金鈴花が盛りだ。

黄金の絨毯の中で、長くウェーブの掛かった空色の髪の少女が振りの向いた。

「アタシ、やっと分かったの。羽根は、自分を守る為にあるんじゃないって」

「うん……」

まだ本調子じゃないカワセミは、ゆっくり土手を下って歩いて来る。

「大切なヒト達を護る為に、授かるんだね」

「うん……」

カワセミは静かに少女の隣に立った。

ユコは屈んで、足元の黄色い花を一つ二つと手折った。

「あそこはピンクの花がいっぱいだけれど、たまには黄色い花も見たいかなあとって」

花束を二つ握って、少女は立ち上がる。

「うん、そっだね……」

なんだかいつもの毒気がなくて、カワセミは穏やかで優しくなった。

それから二人は馬に乗って、ハイマツの丘へ向かった。

てっぺんに玉石が積まれた墓が二つ並んでいる。ユコは摘んで来た花束を一つ一つ供えて、玉石を撫でる。

「シリギも羽根と一緒に。大切なヒト達を護って…、そうして、人間の業を、みんな、一身に背負って…。当たり前みたいに、

飄々と……」

「ああ……」

ユコの馬には、旅支度がぐくぐくつけられていた。

「アタシはシリギの側に居る。海に向こうの凍える島へ、一人きりで行くのなら」

「ユコがそう言い出すのをカワセミは予測していた。

「欲しがるから、失うんだ。叔父上……」

フビライの前に引かれたシリギは、一言だけ、そう言った。

そうして、もうその後は、押ししても引いても喋らなくなった。

フビライはシリギを追い詰めたりはしなかった。バヤンが何か語った訳ではない。彼も口をつぐんでいた。

王は、ただ、居なくなった妖精の娘の言葉を大切にただただ。

好きなものは好きなのだ。その心だけ持っていれば、いつかは、失わず、得る事も出来るのだろうか……？

淡栗毛の彼の命を取ることは、自分の魂をも殺してしまう事だ。シリギに下された処分は、二度と故郷に足を踏み入れる事を許されない……海を越えた遠くの島で一生涯を終える事だった。

ユコはその知らせを聞いて、胸を潰した。今度は彼の横へ行くと言いつ張った。

慈愛が彼女の持つて生まれた、彼女自身を形作るモノなら、誰も止める言葉は持っていなかった。カワセミも……。ただ、馬

に成人の鈴を持たせて見送ってやるだけだった。大昔……大長が自分の妹にそうしたように……。

虜囚を囲った馬車が草原を行く。

その後を黄緑色の馬が舞うように付いて行った。馬上には、馬とバランスの取れていない、長い巻き髪少女……。

城壁の戦神の部屋の窓から、人目に付かぬよう、王は黙って見送った。この部屋の干からびた植物も、石の夜空も、そのままにしてある。気紛れな妖精がいつ遊びに来てもいいように。

バヤンは草原の、見えるか見えないかの地平で、隊列を見つめていた。見送るって……こんな気持ちだったのかと、今更のようになら、想いながら。

バヤンは、シリギに預かった二つの品物を持って、旧王都の西の小さな森に分け入った。

言われた通り、遅咲きの花を咲かせた蜜柑の太木があった。その根元を掘って、金鎖の付いた銀の石を埋め、土を盛った上に赤い石の付いた剣を置いた。

辺りは高い草に覆われて、ここが何の、どうい場所なのか、見当も付かない。ただ、某かの息吹が息づいていて。

風が吹いて、振り向くと、剣はもう消えていた。風が、剣を

帰るべきヒトの所へ運んでくれる…、シリギはそう言っていた。

「分かった…、ここは、護ろう…シリギ……」

バヤンはその後、帝国の重鎮となりフヒライと共に様々な改革を行うが、この森だけには手を付けなかった。

そして百眼の鬪将は前線を離れ、国土はゆっくり分裂して行くのだった。

季節は旅人のように、忙しく過ぎ去って行くが、天井の天の川は変わらずゆるゆると横たわっている。天から見たら、地上なんて…、妖精の一生さえも、一瞬のまたたきなのかもしれない。

ユウは思いの外早く戻って来た。

淡栗毛の彼の命はもうそんなに残っていなかったんだろう。

丁度与えられた命を使い切って、彼はキツチリ生き終えた。

里へ戻ったユウは、シリギの事はあまり喋らなかった。短期間ですっかり背が伸びて面長になったその横顔で、何かをシンと秘めていた。

水色の妖精の傍らで…、王サマの手の内で…、小さいまま「ロロロと甘えていたかった子供はもういない。そうだった呪縛から解かれると、この娘は皆の息を吞ませる姿になって帰って

来た。

「当然ですよ。子供の頃のあの子に瓜二つでしたからね、ユウ

は」

大長はシレットと言って、また西の国へ発って行った。

今、双子に与える相応しい名前を、皆で頭を絞って考えている。もう一人、特別に一緒に名前を授けられる者の名は、即決だったのに…。

もういなくても、蒼の里が人間に与える三つ目の名前。

——『蒼の獅子』——

AC・・・不詳

夜間に息が白い。もう冬間近なんだ。

旧王都も今は焼け落ちた無人の廃墟。

その西の森の蜜柑の木のとっぺんで、カワセミとユウは並んで腰掛けていた。

「それでねえ…、ヘラクレスに倒されたネメアの子は、空に昇って星になるの」

「何で…？」

「何でもよ。そういうお話なの。ソルカ妃のお母さんの生まれ故郷の、遠い西の国のお話」

「シリギはよくそついうの覚えていたな」

「ソルカ妃がね、毎晩話してくれたんだって。ランプの灯りで蜜柑の輪切りを作りながら。西の国の神々の物語や、星のお話。

ソルカ妃も、そうやってお母さんに話して貰ったんでしょうね」

「そうか……」

カワセミは、蜜柑の木の下で寄り添うように佇んでいた二人を想った。

「ソルカ妃が、唯一の家族…みたいなモンだったからな…」

ユコはカワセミの切なそうな横顔をチラリと見てから、前を向いて囁いた。

「シリギはねえ…、子供の頃ね、カワセミ様の事、ずっと『おとうさん』って思っていたんだって…」

「……………」

「あれがレグルス」

ユコは中天の、ネメアの獅子のたてがみに光る蒼い星を指差した。

「そろそろだわ」

獅子のたてがみの中にチロチロと星が煌めき、一つまた一つと流れた。

「シリギの教えてくれた通りだわ。この季節のこの時間に、獅子座のたてがみに星が一杯流れるの」

ユコは嬉しそうに星を数え出した。

碧眼の獅子は……本当は、星の物語を語り、流れ星を眺めながら穏やかな人生を送るべき人物だったんだろう…。

カワセミは、彼の人生の最後に本来の生活を送らせてあげたユコに心底感謝していた。

自分だって…、目覚めてから独り、時の流れに取り残された身に、小さなユコがどれだけ心癒してくれたろう。

いつもいつも、救われていたのは…、自分の方だった……。

天上の流星はピークを迎え、ユコは星を数えきれなくなった。

「ねえ、獅子のたてがみであれだけ星が流れたら、ひと房くらい地上に落ちて来るかしら？」

「……どうかな……」

「シリギの髪みたいに綺麗でキラキラしているかしら？」

「……そうだな……」

「何だかさっきから生返事……」

「……ユコ……」

「また、このお喋り娘がどうやって黙るか…、とか考えているんでしょっつ？」

「……ユコ……」

「……なあに……？」

「……ボクの、妻に、なれ……」

「……………うん……………」

カワセミが上を向いたまま差し出した手に、少女も上を向いたまま指を添えた。そうして、一緒に昔話の星空を旅する。

水色の妖精の背にはまた羽根がある。

星々に照らされる、柔らかい淡栗毛色の、羽根……………。

～おしまい～

二〇〇九・二・二七

